

フランスの音楽史書における 「近代フランス音楽のカノン」試論

成 田 麗 奈

はじめに

本稿は、フランスの音楽史記述における「近代フランス音楽のカノン」に関する予備的考察を行うことを目的とする。対象とするのは1870年以降のフランスの音楽史書である。1870-71年、普仏戦争の敗北により「フランス音楽」のあらたな方向性が模索されると同時に、音楽学の発展に伴い音楽史書の質的・量的な刊行が盛んになっていく。その過程で、現在の我々にとっての「近代フランス音楽」、当時の人々にとっては「同時代の音楽」であり「現代音楽」でもあるフランス音楽をどのようにとらえ、どのような作曲家をカノンとしてとらえてきたのかを辿りたい。本稿では、ニューグローブ世界音楽大事典およびMGGの「フランス」および「パリ」の項目における時期区分をふまえて、1870-1945年を「近代フランス音楽」と暫定的に定義し、1870-1945年間に存命の作曲家を中心に、カノン化が為されているか否かを調査する。「フランスの」作曲家かどうかという判断基準も、同じく2つの事典項目冒頭に書かれている国を基準とし、実際の音楽史記述において「フランス音楽」の文脈で記述されているかどうかを検証する。「近代」の射程および「フランス音楽」の射程に関しては、本来慎重な定義づけが必要であるため、これらに関しては稿をあらためて論じる。

カノンとは、端的に言えば重要な作曲家や作品を指す。音楽学における伝記研究の発展とも相俟って、音楽史記述においては、もっぱら作曲家という存在がカノンの主たる対象として扱われる。カノン形成においては、レパートリーや音楽批評、イデオロギー等の要素が指摘されているが、さまざまな要因が複雑に絡み合って形成されたカノンの認識が歴史的に定位され権威化されるのが音楽史書であると筆者は考える。それどころか、音楽史記述を通じてカノン形成が行われてきたことは、主にドイツ音楽学におけるベートーヴェンやJ.S. バッハという巨大なカノンに関する批判的研究からも明らかである。フランス音楽に関しては、クーペランやラモー、ベルリオーズやドビュッシーといった音楽史全体においても重視される作曲家がカノンとされることは今や揺るぎないものとなりつつあるが、「近代フランス音楽」に関しては、ドビュッシー⁽¹⁾ 以外のカノンについては十分な検討がなされているとは言い難い。以下、音楽家列伝、フランス音楽史・近代フランス音楽

(1) ドビュッシーのカノン化をめぐる問題は、Kelly (2008)、Kelly (2013) および Chimènes (2013) に詳しい。ドビュッシーの受容と音楽史記述の関連性については Trotter (2014) が論じている。

史、西洋音楽通史⁽²⁾に焦点を当て、近代フランス音楽のカノン記述の傾向と、今後検討が必要な論点を提示する。

1. 音楽家列伝におけるカノン

いわゆる音楽家列伝や、複数の作曲家に関する音楽批評集や論考集は、フランスにおいても19世紀後半から徐々に出版されるようになる。音楽史列伝の刊行が本格化するのは1900年代以降のことで、アルカン Alcan 社「大作曲家 Maîtres de la musique」シリーズ、ロラン Laurens 社「有名作曲家 Les musiciens célèbres」シリーズが続々と刊行され、メロテー社からは「音楽作品傑作 les Chefs-d'œuvre de la musique」シリーズも刊行された。これらによって、学術的な成果に基づく作曲家・作品研究が広く一般に知られる機会となり、その中でカノン作曲家の素地が形成されたと考えられる。古今各国の作曲家を幅広く取り上げた音楽家列伝も刊行されているが、近代の作曲家やフランスの作曲家に焦点を当てた音楽家列伝が比較的多い。1900年の万国博覧会および国際学会においてフランス音楽の歴史を概観する大きな節目を迎え、1910年にはローマにおける国際音楽学会において「現代フランス音楽」の状況に関する報告がなされ、これを機に、当時における現代の音楽状況に対する学術的関心が高まったことも背景として挙げられよう。

1870年以降に出版された主要な音楽家列伝（付録資料1-1）において取り上げられている作曲家は付録資料1-2、1-3の通りである。17の文献には、実に69名もの作曲家の名前が連なり、そのうち複数回取り上げられているのは32名である。⁽³⁾ 刊行年順に傾向を見ると、アンベール Imbert（1888）におけるフォーレ⁽⁴⁾を除けば、当初はオペラ作曲家として成功している者の名前が主であるが、ロラン Rolland（1908）を契機として、次第に交響的な作品をはじめ、オペラ以外のジャンルでも活躍する作曲家の名前が増えていく。また、刊行年が現代に近づくにつれ、より若い世代の作曲家へと移行していく傾向も見取れる。こうした中で継続して取り上げられているのはサン＝サーンス、フォーレ、マスネ、ダンディ、ドビュッシーらで、いずれもオペラ作品において傑作・佳作を残していることのみならず、交響的作品ほか幅広いジャンルで傑作・佳作を残した作曲家であることがわかる。

(2) 原則として拙稿（2015）掲載の音楽史書を含め、可能な限り網羅的に音楽史書を参照したが、本稿では、予備的考察という性質をふまえ、特に注目すべき音楽史書に絞って述べていく。

(3) 名前が挙がっている作曲家の多さは、カノン作曲家の共通認識が不十分である作曲家が多いことも示唆するが、この人数の多さこそが近代フランス音楽の豊かさ・多様性を示すものであるという音楽史記述にもつながっていく。

(4) フォーレが音楽史書に登場した最初期の例である。この時点でフォーレはまだオペラを作曲していなかった。

2. フランス音楽史・近代フランス音楽史におけるカノン

フランスにおいては、国外の音楽史や通史、ジャンル別や時代別の著作が多数を占め、フランス音楽の通史はごく僅かである（付録資料2-1）。コカール Coquard(1891) やラヴォワ Lavoix (1891) のように、長らく外国人音楽家に創作の担い手を委ねてきたフランス音楽の歴史を謙虚に記述するものや、ブリュノー(1901)⁽⁵⁾ のように、対外的にフランス音楽の歴史を系統立てて提示し、歴史的連続性と多様性を主張する音楽史記述が初期の例である。だが、1910年代以降、その記述の様相は根本的に変化していく。すなわち、1870年を契機とする近代フランス音楽の変化を肯定的にとらえ、フランス音楽の改革や伝統の再興を称揚し、フランス音楽が世界における覇権を「取り戻した」という認識へと導く主張が顕著になっていくのだ。こうした音楽史観は、近代フランス音楽史に焦点を当てた音楽史書（付録資料2-2）において構築され、確固たるものになっていく。そして、そのようなフランス音楽史の物語を記述するうえで、オペラを主とする劇音楽におけるグノーやマスネ、ビゼー、ラロの改革や、交響曲および室内楽等器楽作品におけるフランクやサン＝サーンスの改革をしてフランス音楽再興の端緒とし、ドビュッシーによってひとつの到達点を迎え、ラヴェルやルーセル、六人組らがさらなる発展を途切れることなく継承していく、というカノンの系譜が描かれていくことになる。

こうした音楽史観は、フランス音楽史の通史として最も広く読まれているデュフルク Dufourcq『フランス音楽 *La musique française*』（1949）においてもっとも明確に系統立てて記述されている。彼は近代フランス音楽を「第四黄金時代」と位置づけている。具体的には1860-1960の100年間が第四黄金期⁽⁶⁾とされ、1850-60年代が前兆、1870年以降がフランス音楽の復興とされ、うち1870-80年がフランス楽派の復興、1880-1900年がフランス楽派の飛躍、1900-1910年が急成長、1910-40年がフランス音楽の支配、という歴史観が展開される。そして、この第四黄金時代の担い手となるカノンの系譜として、以下のような三世代について記述される。うち下線部は七大家 *Pléiade* として賞賛されている作曲家である。

第一世代：グノー、ラロ、フランク、サン＝サーンス

第二世代：フォーレ、ビゼー、シャブリエ、デュパルク、ダンディ、ドビュッシー、デュカ

第三世代：ルーセル、シュミット、ラヴェル

この三世代にわたるカノンを中心とする数多くの作曲家たちの活躍によって、第四黄金

(5) 井上（2009）、塚田（2016）に詳しい。

(6) 1949年版ではいわゆるルネサンス期にあたる第四部を「第一黄金期」、いわゆるバロック時代のヴェルサイユ楽派が活躍する時期を「第二黄金期」、いわゆる近代を「第三黄金期」としているが、1970年改訂版においては第三部「多声音楽の誕生」が「第一黄金期」と位置づけられたため、近代は第四黄金期となった。

期は輝きを増し、過去の黄金時代と同じくフランス音楽の普遍的名声をもたらすとともに、後世の若き音楽家たちにも豊かな収穫を分かち与えたと主張されている。デュブルクは、このほかに『ヨーロッパ音楽小史』(1942)、『起源から今日までの音楽』(1946)といった音楽史書を手がけているが、いずれも時代別に覇権を手中におさめた国を記述する傾向がみられ、19世紀末から20世紀初頭はフランス音楽の優位性が主張されている。

「近代フランス音楽」を「黄金時代」と位置づける記述は、これ以降の音楽史記述にも継承される。ファン・アカールは『フランス音楽の黄金時代』として1870-1950年の音楽を取り上げており、デュブルクの提示した黄金時代がさらに継続していることを印象づけている。そして、その担い手として挙げられているカノン作曲家はフランク、フォーレ、デュカ、ドビュッシー、ラヴェル、ルーセル、シュミット、ミヨー、オネゲルである。

1950年代以降、こうしたフランス音楽優位の記述は少なくなっていくが、ロスタン Rostand(1952)⁽⁷⁾のように、フランス音楽の系譜が途切れなく続いて行くという音楽史観は共通している。ピトルー Pitrou(1957)⁽⁸⁾は序論において、フランス音楽が栄光の松明を他の国に渡す時期にきているかもしれないことを認めつつ、それでもなおフランス音楽の復興を成し遂げた時期のことを誇らしく振り返っている。このように、フランス音楽の他国に対する優位性を主張し、フランス音楽の系譜の継続性⁽⁹⁾を主張する音楽史記述の中で、近代フランス音楽のカノンは、ある程度の異同はありつつも、ごく限られた作曲家へと集約されていく。

3. 通史における「近代フランス音楽」記述

次に、いわゆる西洋芸術音楽の通史における「近代フランス音楽」のカノンについて、1870年以降に刊行された通史のうち、量的・質的に筆者が重要な音楽史書と考える六つに焦点を当てて検証する。「近代フランス音楽」の作曲家について、割かれているページ数を手掛かりに、どのような作曲家がカノンとして扱われているかを確認したい。ページ数と作曲家の評価は必ずしも比例しないが、著者がどの程度の分量を割いて説明したいのかを測るひとつの指標とはなり得る。以下、出版年順（複数巻の場合は第1巻の初版年による）に、記述の概要について述べる。

(7) 三大家すなわちフォーレ、ドビュッシー、ラヴェル以降の音楽を「現代音楽」と位置づけており、1885年以降に生まれた世代の作曲家として、六人組、アルクイユ楽派、「若きフランス」をはじめとする楽派の系譜が記述されている。

(8) 資料1を参照。

(9) フランス音楽史においては、第二帝政期を断絶の時代・衰退の時代とする認識が主であり、その歴史を繰り返さないよう、継続性が強く意識されていたと考えられる。なお、第二帝政期の再評価に関しては、浅井(1989)に詳しい。

3.1. ウーレ『音楽史』(1909-1924)

作曲家で音楽学者としても活躍したウーレ Woollett が著した、全4巻からなる『古代から今日までの音楽史 *Histoire de la musique depuis l'Antiquité jusqu'à nos jours*』(1909-1924)は、フランス学士院芸術アカデミーのボルディン賞を受賞した著作だ。本書は音楽語法の発展という観点から記述されており、譜例を多く取り入れ、各時代の主要な作曲家についてオペラ、交響曲、室内楽、歌曲、ピアノ曲など幅広いジャンルの作品について音楽的特徴を記述している。近代フランス音楽の作曲家に該当するのは第3巻第4章「マイアーベア以降の劇場音楽」および第4巻である。第4巻は第1章「19世紀末の室内楽と交響的芸術」、第2章「リートの歴史」、第3章「現代」、補章「オペレッタと舞踊」という構成で、第3章ではワーグナー以降の各国の音楽の状況について記述されている。

近代フランス音楽の作曲家でもっともページ数が割かれているのはドビュッシー(25頁)である。彼が成し遂げた音楽的な革新について9頁にもわたって詳述されたのち、各ジャンルの主要作品についての説明が続く(16頁)。このほかにも、ドビュッシーがパリ国立音楽院やフランク楽派(スコラ・カントルム楽派)と並んで一大楽派を形成していることも主張されており(Woollett 1924: 331)、いわゆる「ドビュッシスト」として、同時代の作曲家をドビュッシーとの関連から記述している。作品別で詳述されているのは、《弦楽四重奏曲ト短調》、《海》、《ペレアスとメリザンド》であり、譜例やページ数の多さでは弦楽四重奏曲が最も多いが、音楽語法として高く評価されているのは後の2作品である。

次いで多く頁が割かれているのはサン＝サーンス(23頁)である。主要作品のうちでもとりわけ交響曲第3番(いわゆる「オルガン付き」)は、主題労作や主題の循環的な用法などが高く評価され、この作品だけで10頁が割かれており、譜例の多さとしても本書全体の中で破格の扱いである。これに次いでオペラ《サムソンとダリラ》が評価され、サン＝サーンスはマスネと二大巨匠として、グノー以降のオペラ界に君臨していることが指摘されている(Woollett 1924: 305)。

この二人に続くのがフランク(17頁)、グノー(12頁)、マスネ(10頁)である。フランクは楽派形成の功績と室内楽作品の評価、グノーとマスネはオペラと歌曲のジャンルにおける評価が中心となっているが、オペラと交響的作品の双方に傑作を残したドビュッシーとサン＝サーンスに関する記述の厚さには及ばない。

本書におけるその他の特徴としては、フォーレに関して音楽語法の点から評価している最初期の例である可能性が高いこと、ラヴェルはドビュッシーの弟子、フォーレの弟子、という視点から記述されていること、最近の動向として六人組までを扱っているものの、同時代の作曲家が数十名列挙されている中に、サティの名がないことを挙げておきたい。

3.2. ランドルミー『音楽史』（1910年初版・1923年増補改訂版・1942年改訂版）

ランドルミー Landormy『音楽史 *Histoire de la musique*』⁽¹⁰⁾ は、初版の1910年版ではフランス楽派とドビュッシーまでで音楽史を締めくくっていたが、抜本的な加筆改訂を行った1923年版では、フランス音楽の扱いがより大きくなり、ドビュッシー以降の音楽について詳述されている。最新の改訂版である1942年版において上位を占める作曲家は、ドビュッシー（14頁）、サン＝サーンス（9頁）フォーレ（8頁）である。

ドビュッシーに関しては、1910年版においては19世紀末の諸国における民族主義的な動向のひとつとして、ロシア音楽に影響を受けた存在として、フランスの若い世代の代表者として一人のみ取り上げられていたが、1923年版ではあらたに独立した章が充てられ、「今日の音楽」の筆頭に挙げられる作曲家として重視されている。すなわち、先人に多くを負い、ヴァーグナーやロシア音楽などの影響を受けながらも、新しい手法を見つけ出し、これまでに表現されえなかった情緒の創造者となったことが評価されているのだ。特に音楽手法上の革新については、「おそらく全音楽史上で、技巧上これほど唐突で急激な変化は他に見られないだろう。すなわち、伝統的な和声の全体が覆されたのだ」と評されている（Landormy 1942: 435）。いわゆる不協和音の解放や平行和音、エキゾチックな音階や全音音階などの使用があらたな表現の方向性を示したことが述べられる。そして「印象主義」の音楽として独創的な表現を為しえたこともまた、情緒的側面として賞賛されている。ドビュッシーに関しては、単にフランス音楽にとって重要な存在であるというだけでなく、全音楽史において偉大な存在であることを印象づけたいという意図がみてとれる。

サン＝サーンスについては、1910年版ではオペラ作曲家の系譜の中で取り上げられていたが、1923年版では国民音楽協会の創立とともにラロと並んで1章が充てられ、同協会への貢献のみならず、オペラや交響曲、室内楽をはじめとする幅広いジャンルでの活躍と、文筆家としての活躍、楽派を形成せずに孤高の存在であったことなどが記述されている。彼の歴史的な位置づけに関しては、フランスの古典主義者であると評されているが、フォーレの章では「サン＝サーンスはドイツ的な古典主義」とであると述べられており（Landormy 1942: 415）、フランス音楽の文脈の中での評価としては、ドビュッシーやフォーレのほうがより「フランス的」とであるというランドルミーの考えが透けてみえる。

「サン＝サーンスよりもフランス的な古典主義者」と評されたフォーレに関しては、一般聴衆には知られない存在であり、『レクイエム』や室内楽、歌曲、ピアノ曲が、一部の教養ある人々によって鑑賞されるのみであったことが指摘されている。そしてその理由は、「交響曲とオペラを書いていない」ことにあると説明されている（Landormy 1942: 411）。しかしながら、フォーレが官職（パリ国立音楽院）に就くにつれて名声を得るようになったことや、象徴主義の詩人らとの芸術的交歓があったことが述べられる。そして、モーツァルトやベートーヴェンを模倣したドイツ的古典主義であるサン＝サーンスに対し

(10) 改訂の経緯や概要については成田（2016）に詳しい。

て、クーランとラモーの手法による「フランス的な」古典主義者であることが指摘されている。本書においては、フォーレの経歴には言及があるものの、教育者としての功績にはほとんど触れられず、過去のフランスの大作曲家に連なる存在として重視されていることがわかる。

このほかにも、ページ数は少ないものの、グノーがフランス・オペラの再生に貢献したことや、第27章「今日の音楽」において革新的な存在として六人組が中心的な存在として前面に押し出されていることは、カノンに関することとして注目に値する。

3.3. コンバリュール『音楽史』(1913-1918)

フランスの音楽学の黎明期において、音楽史研究の第一人者として活躍したJ. コンバリュールは、全3巻からなる『音楽史 *Histoire de la musique*』を著した。そのうち、第3巻『ベートーヴェンの死から20世紀初頭まで』は、第14章までがコンバリュールにより校正を終えた状態で残されているが、第15章以降はコンバリュールの遺稿やメモに基づいて編集の手が加えられている（塚田 2016: 67）。近代フランス音楽に相当するのは、まさに編集者の手が入った部分であるが、コンバリュールの価値観の一端は窺い知れよう。

近代フランス音楽について書かれているのは第2部「ベルリオーズの後継者たち」および第3部「近年の諸傾向」である。ここで上位を占めているのはグノー(16頁)、 فرانク(16頁) ビゼー(12頁) である。フランクについては交響曲における功績とフランク楽派形成について、グノーとビゼーに関してはオペラにおける功績について高く評価されていることがわかる。楽派形成という観点からは、パリ音楽院ですぐれた弟子を輩出したフォーレ(7頁)、フランク楽派の確立とスコラ・カントルムの創立に貢献したダンディ(7頁)も比較的高く評価されている。また、グノーとサン＝サーンス(9頁)は、オペラと交響曲に重要な作品を残している点でも評価されている。コンバリュールの『音楽史』全体を通じて、フランス音楽を中心とした音楽史記述がなされていること、そのためにオペラと交響曲のジャンルが重要視される傾向があり、このことがカノン作曲家の評価にも関与していると考えられる。

3.4. コンバリュール＝デュメニル『音楽史』

コンバリュールの音楽史を引き継ぎ、デュメニルが大幅に加筆改訂して全5巻からなる『音楽史』が出版された。本書は、各巻のタイトルおよび見出しのタイトルは変更されているものの、第3巻第14章まではコンバリュールが執筆したテキストが使用されている。第3巻以降は構成を変え、一部コンバリュールのテキストに基づきデュメニルによって加筆されている。そして第4巻『20世紀初頭』および第5巻『20世紀前半』は、デュメニルによってあらたに執筆された。デュメニル執筆分に関しては、当時の音楽批評や研究書から、信頼に足る作曲家・作品評価が多数引用されている。本書において、20世紀初頭の新しい動向のひとつとして重視されているのは、音楽的な革新である。このこと自体は、一

般的な音楽史書にもよくある視点だが、その音楽的な革新は脱ヴァーグナーによって可能となり、フランスにおける音楽的な進化や革新が西洋音楽の主流を占めているというのがデュメニルの見解である。実際、第4巻は全21章のうち、フランス以外の状況に触れた章がわずか4章分しかない⁽¹¹⁾。

コンバリュエの死後の動向が音楽史の記述対象となったことで、近代フランス音楽のカノンの顔ぶれも大きく変わる。最も多くページが割かれているのはドビュッシー（52頁）とフォーレ（42頁）であり、それぞれに2章ずつ充てられている。これに次ぐのがルーセル（29頁）、ラヴェル（27頁）、フランク（22頁）である。いずれの作曲家も、1つはピアノ曲や室内楽の分析が含まれるが、交響的作品やオペラ、バレエ音楽についての記述が比較的多い。

ドビュッシーは第4巻の冒頭において世紀転換期における音楽的革新の首領たる存在と位置づけられている。ドビュッシーに充てられた2つの章は「ペレアス以前」「ペレアス以降」に分かれており、前者は弦楽四重奏の解説と、ペレアス以前の初期の作品が扱われている。後者では《ペレアスとメリザンド》における主題の扱いに関する分析や、晩年の室内楽作品についての解説が中心に扱われている。

フォーレについては、革新的であるよりも、むしろフランス音楽の再生（ルネサンス）に貢献し、教会旋法を現代に蘇らせたことが高く評価されている。そして、フォーレを音楽教育的な観点からよりも、音楽的観点から正當に評価しようとしている。室内楽や歌曲、宗教音楽に関する功績はもちろんのこと、注目すべきは舞台作品について詳述していることだ。フォーレは、オーケストレーションが不得手であるため専ら弟子にオーケストレーションを任せていたとも言われるが、それゆえにか、当時においても交響的作品や舞台作品は顧みられず、演奏会レパートリーとしてもほとんど取り上げられる機会はなかった。こうした状況をデュメニルは訝り、室内楽作品や歌曲、舞台音楽《ペレアスとメリザンド》に比肩する分量でオペラ《プロメテ》およびオペラ《ペネロプ》について譜例を多く挙げ解説している。

また、第4巻は、大作曲家の弟子や同時代人という章構成が多いが、その中でもフォーレの弟子と同時代の作曲家に3章が充てられている。フランクの弟子にも3章が充てられ、ギローとマスネの弟子があわせて1章、ダンディの弟子に1章が充てられている。なお、ページ数では上位から5番目にあたるラヴェルに関しては、その他の作曲家が単独でひとつもしくは複数の章を充てられているのに対して、ラヴェルは第14章「フォーレの弟子〔その2〕」という章でロジェ＝デュカスとともに扱われている点も注目に値する。

(11) 第12章「ヴェリスム」、第13章「ドイツ音楽：マックスブルッフとマックス・レジェールからリヒャルト・シュトラウスまで」、第14章「シェーンベルクとその弟子」、第15章「五人組以降のロシア楽派：ストラヴィンスキー」

3.5. ロラン＝マニユエル『音楽史』

現在にいたるまで、フランスの音楽史書においてもっとも重要な著作の筆頭に挙げられるのは、ロラン＝マニユエル編『音楽史 *Histoire de la musique*』である。本書は全2巻からなり、『プレイアード事典』の第7巻として刊行されている。第二次世界大戦以降の音楽史書は、入門書など小規模な著作を除き、共著による音楽史書が主流となり、フランスの古き伝統を持つ音楽事典的な様相を持つものが多くなる。本書もまた、音楽史書であると同時に音楽事典として、あるいは論文集として読まれるべき、濃密な内容を湛えている。本書では起源から現代（20世紀後半）までのいわゆる西洋芸術音楽史に加え、演奏会場外の音楽として、カリヨンやシャンソン、映画音楽やラジオ放送・テレビ放送についての論も所収されている。また、巻末には音楽学および音楽批評の歴史についても載せられている。

近代フランス音楽が扱われているのは古典主義以降を扱った第2巻である。ここでは、「ロマン派の遺産」として「後期ロマン派の西欧の進化」でサン＝サーンスやフランスのオペラが、「フランスの革新」ではシャブリエ、フランク、ダンディが、「20世紀」でドビュッシー、ラヴェル、デュカ、ルーセル、サティらが扱われている。「現代音楽」においては、ジゼル・ブルレが現代音楽をめぐる美学的考察ののち、サティと六人組以降の作曲家について論じている。

本書における近代フランス音楽に関して、単独の章が設けられているのは、フランク（20頁）、ドビュッシー（17頁）、ルーセル（16頁）、ラヴェル（14頁）、サティ（11頁）、シャブリエ（10頁）、デュカ（7頁）、サン＝サーンス（6頁）、ダンディ（6頁）である。いっぽう、章のタイトルには名前がないが比較的ページ数が多い作曲家として、ブーレーズ（13頁）、メシアン（11頁）、オネゲル（11頁）、ミヨー（9頁）、フォーレ（9頁）が挙げられる。この頃にはようやく、メシアンやブーレーズらがカノン作曲家として音楽史書に詳述されるようになることに加え、それに先行する世代として、六人組が現代音楽の一隅として定位していることが確認できる。共著という性質上、これらの作曲家の扱いについては、他の音楽史書以上に、ページ数のみで一概に判断しがたく、担当執筆者の意図や著述スタイルの特徴をふまえて慎重に考察する必要がある。ここでは、単独の章が与えられている作曲家や、10頁前後ページが割かれている作曲家は、音楽的な革新や音楽教育上の貢献といった側面よりも、楽曲分析に価する作品の数と質を有するかどうかが重視されている可能性のみ指摘しておきたい。

3.6. シャイエ『音楽史講義』（1983-1990）

パリ国立音楽院事務総長を経て副院長、パリ大学音楽史教授・音楽学研究所所長、パリ・スコラ・カントルム校長を歴任し、音楽史教育において絶大なる貢献をしているジャック・シャイエは、音楽院および音楽学の教育機関における音楽史教育のために、全4巻からなる『音楽史講義 *Cours d'histoire de la musique*』を刊行している。全5巻は第1

巻『起源から17世紀まで』(5分冊・単著)、第2巻『18世紀』(5分冊・共著)、第3巻『19世紀』(3分冊・共著)、第4巻『20世紀』(分冊なし・共著)で構成されている。第2巻・第3巻の共著者は1名であるが、第4巻では共同執筆者は12名にもものぼる。第4巻は3部構成となっており、第1部「20世紀初頭」(1890-1920年頃)、第2部「大戦間」(1920-1945)、第3部「1945年・戦後」(1945年まで)に分かれている。第1部・第2部の題目と時期区分にはやや食い違いがあるように見受けられるが、本文中では1870年、1914年、1939年という政治史の区切りが意識されている。

本書における近代フランス音楽のカノンの扱いを確認しよう。第2章第1節(第1部)は「聴くことの探求——フランス音楽の4大家：フォーレ、ドビュッシー、ラヴェル、ルーセル」と題されている。本章においては題目の「聴くことの探究」のほか、音楽語法や様式における新しさが重視されていることが窺われる。作曲者の名前は生年順に並んでいるが、ページ数の観点からは、ドビュッシー(6頁)とルーセル(6頁)がほぼ同等に扱われており、フォーレ(4頁)、ラヴェル(4頁)がこれに次ぐ。本書において作曲家に一項割かれる場合の区分は各作曲家によって異なり、フォーレは声楽・器楽のジャンル別、ドビュッシーは《ペレアス》以前と以降に分けて各ジャンルについて記述されている。ラヴェルは戦前・戦中と戦後に分けて、ルーセルは作風の変化に合わせて三期に分けて記述されている。この4名は、国別にアルファベットで項目が分けられている第4章(第2部)「過去の遺産」においても1930年以降の動向が記述されている。

なお、本章においては、20世紀には六人組やアルクイユ楽派をはじめ、さまざまな楽派が競合していたことが指摘されており、楽派に属さない作曲家はアンデパンダンとして列挙されている。本稿の対象からは外れるが、第8章および第9章(いずれも第3部)においても、フランス音楽は楽派とアンデパンダンという構成になっている。⁽¹²⁾

さらに本書の特徴として、フランス音楽に「パリ楽派」のような外国人作曲家も含めていること、ジャズを十二音技法に並ぶ新しい動向として重視していることも挙げておきたい。

3.7. その他の音楽史書

入門書においては、より簡略化した音楽史の見取り図を提示する必要があるため、ドビュッシー、ラヴェルの二大作曲家のクローズアップが多く、フォーレと三人での括りも少数みられる。いっぽうで、第二次世界大戦後の音楽史書においては、英独語圏の音楽史書の記述と類似した内容が目立つようになり、フランク、サン＝サーンス、ダンディらの

(12) なお、他国の記述に関しては「アンデパンダン」という分類は一切見られず、複数の作曲家をまとめて扱う場合には「他の作曲家」「生徒・弟子」といった表記になっている点も特徴である。ベルリオーズやドビュッシーのような記念碑的作曲家を除くと、楽派に関連しないとみなされる作曲家はアンデパンダンとしてまとめて記述される。この傾向は本書に限らず、フランスの音楽史書の典型である。

扱いが小さくなる。これらについては、パリ国立音楽院楽派とスコラ・カントルム楽派や、革新派と保守派との思想的対立として語られることが多いが、パリ音楽院関係者の音楽史書も、スコラ関係者の音楽史書も、どちらかの出身者に偏った記述はしていないことから、国内の思想的対立に起因するものと判断するのは短絡的である。むしろ、国外の同時期の音楽との差別化という観点から、いわゆる「ドイツ的な」ジャンルを手がけ、ヴァーグナーの影響が多大であったと考えられている作曲家の扱いが矮小化していったのではないかと推察される。

4. 「近代フランス音楽のカノン」の要件

以上をふまえると、近代フランス音楽のカノンとして名を挙げるべき存在はおのずと限られてくることがわかる。すなわち、以下の20名が挙げられる（生年順）。グノー、 فرانク、ラロ、サン＝サーンス、ビゼー、シャブリエ、マスネ、フォーレ、デュパルク、ダンディ、ショーソン、ドビュッシー、デュカ、サティ、ケックラン、ルーセル、シュミット、ラヴェル、オネゲル、ミヨーである。1870-1945年間に限定することは、生年による有利不利も考えられるが、そのことを差し置いても、ドビュッシーが突出して重要視されていることは確かである。また、世代別に見ても、フォーレとラヴェルは群を抜いて注目度が高い。いっぽう、一般的な知名度は高くないものの、ラヴェルの同世代のルーセルやシュミットの評価も高いことが窺われる。また、六人組の代表格としても独立した作曲家としても評価されるオネゲル、ミヨーも、1890年代生まれということを考慮すると、評価が高いといえる。

上記の作曲家に関して、「近代フランス音楽のカノン」なのかという問題に関しては、冒頭で述べた「近代」の射程とも深く関わることであるが、グノー、サン＝サーンス、フォーレをはじめ、音楽史書によって近代以前、具体的にはロマン派や古典音楽として位置付けられる作曲家もいるため、時代区分との関連性をふまえて検討する必要があるだろう。なお、上記に挙げなかったメシアンとブーレーズに関しては、後者は「現代音楽」の筆頭に挙げられる作曲家として今なお強固なカノン化が為され続けているが、前者に関しては、近代と現代のいずれに含められるかという点も含めて検討が必要である。

それでは、これらの作曲家は、なぜ、いかにカノンたりうると判断されているのだろうか。フランスにおいては、1870年から1920年ごろまでの音楽史書においては、オペラ作品が書けるかどうかのカノンの要件として自明視されていたが、第一次世界大戦前後に音楽史観の抜本的な転換があったと考えられ、カノンの要件が多様化する。筆者の仮説としては、以下の四つの要件のうち複数を満たしていることが挙げられる。

第一に、音楽語法および音楽のあり方に新たな方向性を提示することである。平行和音や全音音階、五音音階など、いわゆる機能和声の解放の端緒となったドビュッシーがその筆頭に挙げられるが、次第にフォーレ、ラヴェルも同様の視点からカノン化されていく。

六人組のうちミヨーとオネゲルは多調性の探求者として前衛の一翼を担う存在として注目された。また、「むきだしの音楽」「簡潔な音楽」の追究や、タイプライターやルーレットなど「音楽外」の音に着目したサティも、新たな方向性を切り開いた存在として評価されている。

第二に、音楽教育における多大な功績を残す、もしくは楽派を形成することである。⁽¹³⁾ フランク楽派を形成し、スコラ・カントルムの設立に資したフランクとダンディを筆頭に、パリ音楽院において優れた弟子を排出したフォーレもまた高く評価されている。あわせて、国民音楽協会の設立に尽力したサン＝サーンスやフランク、ダンディ、独立音楽協会の設立に関わったフォーレらの功績も重視されている。また、教育機関とは別に、先導者として多くの作曲家や芸術家の賛同者を得て楽派を形成した作曲家もカノンと目される。ドビュッシーが「印象主義」の音楽による「ドビュッシスト（ドビュッシー主義者）」や《ペレアスとメリザンド》を賞賛する「ペレアストル」といった賞賛派を生み出したことはよく知られている。サティの周囲に、ラヴェルを中心とする青年グループの結成（未遂に終わる）、六人組、アルカイユ楽派が結成されたこともまた、カノンの一因として考慮すべきであろう。

第三に、音楽観をめぐる賛否両論を引き起こすスキャンダルを起こすことである。ドビュッシーの《ペレアスとメリザンド》（1902年初演）、ストラヴィンスキー《春の祭典》（1912年初演）、サティ《パラーデ》（1917年初演）における初演時の一大スキャンダルと、音楽批評における賛否両論の大論争は、音楽史上における重要な出来事として刻まれているが、こうしたスキャンダルが話題を呼んで興行的に成功することや、ひいては音楽史に名を残すことにもつながることについて、作曲家たちは自覚的であったと考えられる。自らの表現したいことを追究し、スキャンダルを厭わず新たな価値観を提示するという純粋な動機だけではなく、ラヴェルやサティ、六人組をはじめ、意図的にスキャンダルを起こすことを狙った者たちもいた。

第四に、オペラもしくは舞台作品および交響的作品に「傑作」を残すことが挙げられる。第一次世界大戦以前の音楽史書においては、オペラ作曲家を中心とする音楽史記述が中心となっており、カノン作曲家としてもオペラ作曲家の名が多くを占めていたが、1910年以降の音楽史書、とりわけフランス音楽の優位性や「黄金時代」が主張される記述において、その担い手として評価されるべきカノン作曲家は、オペラのみならず交響的作品に佳作を残すことが暗黙の前提とされ、さらに室内楽や歌曲、ピアノ曲などで功績を残しているかによってさらなる評価が上積みされる方向性に変化していく。それゆえ、グノー、ビゼー、マスネらは名前が残っているものの、シャルパンディエやブリュノー、レイエルらは「忘れ去られた」作曲家へと、徐々に追いやられてしまうことになる。

(13) ただし、パリ音楽院でローマ賞受賞者を数多く輩出したマスネの教育上の功績にはあまり注目されないことから、何を以って功績とみなすかについては一考の余地がある。

一般的に傑作を残すことがカノンの要件の筆頭に挙げられるべきところ、第四の要素として述べていることには理由がある。実際のところ、カノンとして名を挙げた作曲家のなかには、オペラか交響的作品のいずれかを手がけていないものや、両方手がけているにもかかわらず「傑作」とは言いがたいものが含まれる場合もあるからである。にもかかわらず、音楽史記述においては、この二つのジャンルにおいて功績を残しているということがひとつの大義名分として、その他の三要素を凌ぐ、あるいは覆い隠すような形で存在している可能性がある。

以上の四つの要件に加えて、補足的な要素として、演奏会レパートリーとして大人気を誇る作品を有すること（たとえばラヴェルのボレロなど）、フランス国外、とりわけ20世紀初頭においてはアメリカやイギリスなど英語圏で成功することが挙げられる。国外の演奏会で成功をおさめ、特に英語圏の音楽批評誌で名声を得ることによって、フランス音楽のカノンとしての価値が逆輸入されるという構造が存在していると考えられる。

おわりに

このように、音楽史書をパノラマ的に概観してきたが、本稿において提示したカノン作曲家の概要およびカノンの要件の仮説を足がかりとして、個々の作曲家の評価の変遷やカノン化の過程（の有無）については稿をあらためて論じねばならない。また、個々の音楽史書の刊行意図や、第三共和政期の音楽史観にも考慮しながら、より綿密な調査研究を進めていく必要があるだろう。そして、カノン形成の諸要因のうち、言説空間において、すなわち音楽批評や伝記、作曲家研究等の成果によって形成されたカノンが、音楽史書においてどのように定位し権威化されるのか、そのナラティブの過程を明らかにしていきたい。

参考文献

事典項目

- Anderson, Gordon A. et al. 2017. "Paris." *Grove Music Online. Oxford Music Online*. Oxford University Press, accessed January 15, 2017.
<http://www.oxfordmusiconline.com/subscriber/article/grove/music/40089>.
- Coover, James B. and John C. Franklin. 2017. "Dictionaries & encyclopedias of music." *Grove Music Online. Oxford Music Online*. Oxford University Press, accessed January 15, 2017.
<http://www.oxfordmusiconline.com/subscriber/article/grove/music/51332>.
- François Lesure, et al. 2017. "France." *Grove Music Online. Oxford Music Online*. Oxford University Press, accessed January 15, 2017.
<http://www.oxfordmusiconline.com/subscriber/article/grove/music/40051>.
- Grienski, Jean et al. 1994. "Frankreich" In *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, Sachteil Bd. 3. 687-818.
- Schilling-Wang, Britta et al. 1994. "Paris" In *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, Sachteil Bd. 7. 1352-1390.

一次資料（資料1～3掲載分を除く）

- Dufourcq, Norbert. 1942. *Petite histoire de la musique en Europe*. Paris: Larousse.
- . ed. 1946. *La Musique des origines à nos jours*. Paris: Larousse.
- . 1948. Pour servir à la connaissance de l'histoire de la musique. Paris: la Colombe.
- . ed. 1965. *La musique: les hommes, les instruments, les oeuvres*. Paris: Larousse.
- Masson, Paul-Marie et al. 1913. *Rapport sur la musique française contemporaine*. Rome: tip. di Armani e Stein.

二次資料

- Chimènes, Myriam and Alexandra Laederich eds. 2013. *Regards sur Debussy*. Paris: Fayard.
- Kelly, Barbara L. ed. 2008. *French Music, Culture, and National Identity, 1870-1939*. New York: University of Rochester Press.
- Kelly, Barbara L. ed. 2013. *Music and Ultra-Modernism in France: A Fragile Consensus, 1913-1939*. Woodbridge: Boydell Press. (Music in Society and Culture)
- Trotter, Danick. 2014. “Présentation du dossier: Debussy au pluriel “ La revue musicale OICRM. vol. 2, no. 1. <http://ancien.revuemusicaeoicrm.org/presentation-du-numero-debussy-au-pluriel/>.

- 井上さつき 2009 『音楽を展示する：パリ万博1855-1900』 法政大学出版局
- 浅井香織 1989 『音楽の「現代」が始まったとき：第二帝政下の音楽家たち』 東京：中央公論社（中公新書 938）
- 塚田花恵 2015 「コンバリュール『音楽史』にみる共和国のシンボルとしてのベルリオーズ像——第三共和政フランスの音楽史学とカノン形成——」『音楽学』第61巻2号：65-79.
- 2016 「『われわれのワーグナー』としてのベルリオーズ：ブリュノーの「フランス音楽」（1901）におけるベルリオーズ評価」『ムーサ』（沖縄県立芸術大学音楽学研究誌）第17号：81-92.
- 成田麗奈 2015 「1870-1939年に刊行されたフランスの音楽史書に関する基礎研究」『フェリス女学院大学音楽学部紀要』第15号：9-32.
- 2016 「ポール・ランドルミー『音楽史』における「今日の音楽」『パラゴネ』第3号：59-78.

本稿はJSPS 科研費（若手研究B、研究課題番号23820020および課題番号25870215）の成果の一部である。

付録

資料 1 : 1870年代以降に刊行された音楽家列伝において取り上げられている作曲家一覧
(下線部は1870-1945年間に存命のフランスの作曲家)

1-1 音楽家列伝の目次 ⁽¹⁾

Clément, Félix. 1882. *Les Grands Musiciens*. Paris: Hachette.

Palestrina. Lulli. Rameau. Haendel. Bach. Gluck. Piccinni. Haydn. Grétry. Mozart. Beethoven.
Boielieu. Auber. Hérold. Rossini. Meyerbeer.

Imbert, Hugues. 1888. *Profils de musiciens*. Paris: Fischbacher.

Tchaikowsky. Brahms. Chabrier. d'Indy. Fauré. Saint-Saëns.

Jullien, Adolphe. 1892. *Musiciens d'aujourd'hui*. (2 vol.) Paris : Librairie de l'art.

Tome 1. Berlioz. Schumann. Thomas. Wagner. Verdi. Gounod. Lalo. Reyer. Brahms. Saint-Saëns.
Bizet. Massenet.

Tome 2. Beethoven. Auber. Weber. Meyerbeer. Berlioz. F.David. Wagner. Massé. Reyer. Poise.
Saint-Saëns. Delibes. Guiraud. Dubois. Joncières. Massenet. Pessard. Paladilhe. Holmès. Godard.

Imbert, Hugues. 1892. *Nouveaux Profils de musiciens*. Paris: Fischbacher.

Boisdeffre. Dubois. Gounod. Holmès. Lalo. Reyer.

Bellaigue, Camille. 1896. *Portraits et silhouettes de musiciens*. Paris: Delagrave.

Haydn. Mozart. Gluck. Beethoven. Rossini. Weber. Mendelssohn. Schumann. Auber. Berlioz.
Wagner.

Imbert, Hugues. 1897. *Profils d'artistes contemporains*. Paris: Fischbacher.

Castillon. Lacombe. Lefebvre. Massenet. A.Rubinstein. Schuré.

Servières, Georges. 1897. *La Musique française moderne*. Paris: G. Havard fils.

Franck. Lalo. Massenet. Reyer. Saint-Saëns.

Rolland, Romain. 1908. *Musiciens d'aujourd'hui*. Paris: Hachette. [邦訳 野田由之訳 1981

『今日の音楽家たち』 東京：みすず書房 (ロマン・ロラン全集21)]

Berlioz. Wagner. Saint-Saëns. d'Indy. Debussy. Wolf. R. Strauss.

Vuillermoz, Émile. 1920. *Visages de musiciens*. Paris: E. F. d'Alignan.

Beethoven. Wagner. Mozart. Liszt. Haendel. Rameau. Schumann. Schubert. Palestrina. Chabrier.
Rimskiï-Korsakov. Bizet. J. S.Bach. Berlioz. Gluck. Chopin. Haydn. Lully. Weber. Mendelssohn.
Franck. Debussy. Stravinskiï. Mousorgskiï.

Séré, Octave. 1921. *Musiciens français d'aujourd'hui*. Paris: Mercure de France.

Bizet. Bordes. Bruneau. Castillon. Chabrier. Charpentier. Chausson. Chevillard. Debussy.

(1) 目次のうち、音楽家列伝以外の部分は割愛する。

- Delibes. Dukas. Duparc. Fauré. Franck. d'Indy. Ladmirault. Lalo. Lekeu. Massenet. Messager.
Pierné. Poueigh[Séré.] Ravel. Roussel. Saint-Saëns. Schmitt. Séverac.
- Chantavoine, Jean. 1921. *De Couperin à Debussy*. Paris: Libr. Félix Alcan.
 Les Couperin. Rameau. Gluck. Berlioz Chabrier. Massenet. Debussy.
- Boschot, Adolphe. 1922. *Chez les musiciens, du XVIIIe siècle à nos jours*. Paris: Plon-Nourrit et Cie.
 Mozart. Monsigny. Beethoven. Méhul. Weber. Meyerbeer. Berlioz. Schumann. R. Wagner. Mahler.
 R. Straus. S. Wagner. Saint-Saëns. Massenet. Fauré. Bruneau. Charpentier. Messager. Dukas.
Rabaud. d'Indy. Magnard.
- Coeuroy, André. 1922. *La Musique française moderne. Quinze musiciens français*. Paris: libr. Delagrave.
Fauré. Ravel. Dukas. Schmitt. Roussel. Roger-Ducasse. d'Indy. Duparc. Ropartz. Le Flem.
Dupin. Rabaud. Honegger. Milhaud. Satie.
- Vuillermoz, Émile. 1923. *Musiques d'aujourd'hui*. Paris: les Éditions G. Crès et Cie.
Fauré. Koechlin. Aubert. Strawinsky. D.-E. Imghelbrecht. Migot. Saint-Saëns. Schmitt. Monpou.
Honegger. Schoenberg. Ravel. Debussy.
- Dumesnil, René. 1938. *Portraits de musiciens français*. (Les Maîtres de l'histoire) Paris: Plon.
Boulanger. Debussy. Séverac. Saint-Saëns. Terrasse. Chevillard. Fauré. Caplet. Satie. Messager.
Vuillemin. Huré. d'Indy. Cras. Duparc. Bruneau. Pillois. Dukas. Doyen. Ferroud. Widor. Vierne.
Pierné. Roussel. Ravel.
- Boschot Adolphe. 1946-47. *Portraits de musiciens*. (2 vol.) (Les maîtres de l'histoire) Paris: Plon.
 Tome 1. I. Portraits de musiciens. Le conflit Berlioz-Wagner. Rossini au bout d'un siècle.
Chabrier: Les angoisses et la tendresse d'un génie bouffé. Edvard Grieg. poète des fjords. César
Franck. Reyer: Les «compositeurs-modistes». Berlioz et la musique russe: L'influence
 berliozienne encore vivante. Moussorgsky: Boris Godounov. Parsifal quitte sa «colline sacrée»
Massenet. Gabriel Fauré. André Messager. Ravel.
- Tome. 2. Portraits de Musiciens. Dialogue avec Hoffmann (en façon de préface). Monsigny:
 Débuts du genre «opera-comique»; Déserteur. Beethoven. Wagner expliquant Beethoven.
Gounod: Un mélodiste. Edouard Lalo: La volonté d'un isolé. Léo Delibes. ou l'heureuse
 destinée. Chabrier. d'après ses lettres à Nanie et à quelques amis. Edouard Colonne. Saint-Saëns.
Debussy et ses boutades. Paul Dukas.
- Pitrou, Robert. 1957 *De Gounod à Debussy*. Paris: A. Michel. [藤原裕訳 1973 『フランス音楽
 の11人——グノーからドビュッシーへ』 東京：音楽之友社]
Gounod. Saint-Saëns. Lalo. Bizet. Chabrier. Fauré. Franck. Duparc. Chausson. d'Indy. Dukas.

1-2 複数回取り上げられている作曲家 (生年順)

作曲家名	生没年 / 著者名	Clement (1882)	Imbert (1888)	Julien (1892)	Imbert (1892)	Bellaigue (1896)	Imbert (1897)	Servières (1897)	Rolland (1908)	Vuillermoz (1920)	Séré (1921)	Chantavoine (1921)	Boschot (1922)	Coeuroy (1922)	Vuillermoz (1923)	Dumesnil (1938)	Boschot (1946-47)	Pitrou (1957)	合計
Auber, François	1782-1871	○		○		○											○		3
Gounod, Charles-François	1818-1893			○													○	○	4
Franck, César	1822-1890						○			○	○						○	○	5
Lalo, Édouard	1823-1892			○			○				○						○	○	6
Reyer, Ernest	1823-1909			○				○									○		4
Saint-Saëns, Camille	1835-1921		○	○				○	○		○		○		○	○	○	○	10
Delibes, Léo	1836-1891			○							○						○		3
Dubois, Théodore	1837-1924			○															2
Castillon, Alexis de	1838-1873						○				○								2
Bizet, Georges	1838-1875			○						○	○							○	4
Chabrier, Emmanuel	1841-1894		○							○	○	○					○	○	6
Massenet, Jules	1842-1912			○				○			○	○	○				○	○	7
Fauré, Gabriel	1845-1924		○								○		○	○	○	○	○	○	8
Holmès, Augusta	1847-1903			○															2
Duparc, Henri	1848-1933													○				○	4
d'Indy, Vincent	1851-1931		○						○				○	○				○	7
Messager, André	1853-1929										○		○	○			○		4
Chausson, Ernest	1855-1899										○							○	2
Bruneau, Alfred	1857-1934										○		○			○			3
Chevillard, Camille	1859-1923										○					○			2
Charpentier, Gustave	1860-1956												○						2
Debussy, Claude	1862-1918								○	○	○	○			○		○		7
Pierné, Gabriel	1863-1937										○					○			2
Dukas, Paul	1865-1935												○	○		○	○	○	6
Satie, Erik	1866-1925													○					2
Roussel, Albert	1869-1937													○					3
Schmitt, Florent	1870-1958										○			○	○				3
Séverac, Dédodat de	1872-1921										○					○			2
Rabaud, Henri	1873-1949												○						2
Ravel, Maurice	1875-1937										○			○			○		5
Le Flem, Paul	1881-1984													○	○		○		2
Honegger, Arthur	1892-1955													○	○				2

1-3 一回のみ登場する作曲家 (生年順)

David, Félicien (1810-1876). Thomas, Ambroise (1811-1896). Massé, Victor (1822-1884). Poise, Ferdinand (1828-1892). Guiraud, Ernest (1837-1892). Lacombe, Paul (1837-1927). Boisdéffre, René de (1838-1906). Joncières, Victorin de (1839-1903). Schuré, Édouard (1841-1929). Lefebvre, Charles-Édouard (1843-1917). Pessard, Émile (1843-1917). Paladilhe, Émile (1844-1926). Widor, Charles-Marie (1844-1937). Godard, Benjamin (1849-1895). Bordes, Charles (1863-1909). Ropartz, Joseph-Guy (1864-1955). Dupin, Paul (1865-1949). Magnard, Albéric (1865-1914). Koechlin, Charles (1867-1950). Terrasse, Claude (1867-1923). Lekeu, Guillaume (1870-1894). Vierné, Louis (1870-1937). Roger-Ducasse, Jean (1873-1954). Pouëig, Jean [Séré, Octave] (1876-1958). Aubert, Louis (1877-1968). Huré, Jean (1877-1930). Ladmiraault, Paul (1877-1944). Pillois, Jacques (1877-1935). Caplet, André (1878-1925). Cras, Jean (1879-1932). Vuillemin, Louis (1879-1929). Inghelbrecht, Désiré-Emile (1880-1965). Doyen, Albert (1882-1935). Migot, Georges (1891-1976). Milhaud, Darius (1892-1974). Boulanger, Lili (1893-1918). Ferroud, Pierre-Octave (1900-1936).

資料2：フランス音楽史・近代フランス音楽史

2-1 フランス音楽史

Coquard, Arthur. 1891. *De la musique en France depuis Rameau*. Paris: Calman Lévy.

Lavoix, Henri. 1891. *La musique française*. Pais: Ancienne Maison Quantin. [小松耕輔、小松清
訳 1958 『フランス音楽史』 東京：音楽之友社]

Bruneau, Alfred. 1901. *La Musique française. Rapport sur la musique en France du XIIIe au XXe
siècle. La musique à Paris en 1900 au théâtre, au concert, à l'exposition*. Paris: Eugène Fasquelle.

Chantavoine, Jean. 1921. *De Couperin à Debussy*. Paris: Libr. Félix Alcan.

Weill, Janine. 1935. *De Couperin à Ravel, panorama de la musique française. Conférence donnée
en mai 1934 au Conservatoire national de Lisbonne et à l'Académie de musique de Coimbre*.
Coimbra: Coimbra Editora.

Landormy, Paul. 1943-44. *La musique française*. Paris: Gallimard.⁽²⁾

-après Debussy (1943)

-de Franck à Debussy (1943)

-de la Marseillaise à la mort de Berlioz (1944)

Gaudefroy-Demombynes, Jean. 1946. *Histoire de la musique française*. Paris: Payot.

Dufourcq, Norbert. 1949. *La musique française*. Paris: Larousse. [遠山一行、平島正郎、戸口幸
策訳 2009 『フランス音楽史 新装復刊』 東京：白水社]

Reinhard, Marcel ed. 1954. *Histoire de France*. Paris: Larousse.⁽³⁾

2-2 近代フランス音楽史

Solenière, Eugène de. 1901. 1800-1900. *Cent années de musique française, aperçu historique*.
Paris: Puyno.

Masson, Paul-Marie. 1913. *Rapport sur la musique française contemporaine*. Rome: tip. di Armani
e Stein.

Mauclair, Camille. 1914. *Histoire de la musique européenne, 1850-1914: les hommes, les idées, les
oeuvres*. Paris: Fischbacher.

Jean-Aubry, G. 1916. *La musique française d'aujourd'hui*. Paris: Perrin.

Marnold, Jean. 1917. *Le Cas Wagner. La musique pendant la guerre*. Paris: Bossard.

Tiersot, Julien. 1918. *Un demi-siècle de musique française, entre les deux guerres 1870-1917*. Paris:
F. Alcan.

(2) 当初は両大戦間のフランス音楽史として2巻本が計画されていた（1942年4月24日付の手紙によ
る。Médiathèque Musicale Mahler – Fonds Charles Koechlin Boîte 3）。翌年『ラ・マルセイエーズから
ベルリオズの死まで』が刊行された。

(3) 音楽史はデュフルクが担当。

- Rohozinski, Ladislav dir. 1925-28. *Cinquante ans de musique française, de 1874 à 1925*. (2 vol.) Paris: les Éditions musicales de la Librairie de France.
- Bernard, Robert. 1930. *Les tendances de la musique française moderne*. Paris: Durand.
- Dumesnil, René. 1930. *La Musique contemporaine en France*. (2 vol.) Paris: A. Colin.
- Dumesnil, René. 1946. *La musique en France entre les deux guerres: 1919-1939*. Paris: Editions du Milieu du monde.
- Rostand, Claude. 1952. *La Musique française contemporaine*. (Que sais-je?) Paris: Presses universitaires de France. [吉田秀和訳 1953 『現代フランス音楽』 東京：白水社]
- Hodeir, André. 1961. *La musique depuis Debussy*. Paris: Presses universitaires de France.
- Van Ackere, Jules. 1966. *L'Age d'or de la musique française (1870-1950)*. Bruxelles: Medders.
- François-Sappey, Brigitte. 2013. *La musique en France depuis 1870*. Paris: Fayard.

資料3：主要な通史におけるカノン作曲家のページ数（各上位10名）

- Woollett, Henry. 1909-1924. *Histoire de la musique depuis l'Antiquité jusqu'à nos jours*. (4 vol.) Paris: Publication du "Monde musical."
- Debussy(25), Saint-Saëns(23), Franck (17), Gounod(12), Massenet(10), Fauré(7), d'Indy(5), Ravel(5), Chabrier(4), Chaussou(4), Dukas(4), Schmitt(4)
- Landormy, Paul. 1910 (rev. ed. 1942). *Histoire de la musique*. Paris: Delphane.
- Debussy(14), Saint-Saëns(9), Fauré(8), d'Indy(7), Franck(5. 5), Ravel(5), Schmitt(3), Gounod(3), Bizet(2. 5), Roussel(2), Honegger(2), Milhaud(2)
- Combarieu, Jules. 1913-19. *Histoire de la musique*. (3 vol.) Paris: A. Colin.
- Franck (16), Gounod(16), Bizet(12), Saint-Saëns(9), Debussy(7), Fauré(7), d'Indy(7), Chabrier(6), Ravel(3), Schmitt(3), Lalo(3)
- Combarieu, Jules et René Dumesnil. 1955-60. *Histoire de la musique*. (5 vol.) Paris: A. Colin.
- Debussy(52), Fauré(42), Roussel(29), Ravel(27), Franck(22), Honegger(20), Milhaud(19), Schmitt(17), Gounod(15), Bizet(15)
- Roland-Manuel dir. 1960-63. *Histoire de la musique*. (2 vol.) Paris: Gallimard.
- Franck (20), Debussy (17), Roussel (16), Ravel (14), Boulez (13), Messiaen (11), Honegger (11), Satie (11), Milhaud (10), Chabrier (10), Fauré (9)
- Chailley, Jacques dir. 1990. *20e siècle*. (Cours d'histoire de la musique. T4) Paris: A. Leduc.
- Debussy (6), Roussel (6), Ravel (4), Fauré (4), Honegger (1. 25), Satie (1), Milhaud (1), Dukas (0. 25), d'Indy (0. 25), Schmitt (0. 25)